

学長のコラム

忙中閑あり finding odd moments in my busy life

「忙中閑あり」という言葉は、明治から昭和に生きた陽明学者 安岡正篤の座右の銘「六中観（りくちゅうかん）」に由来する。「ただの閑は退屈でしかない。ただの忙は文字通り心を亡ぼすばかりである。真の閑は忙中にある。忙中に閑あって始めて生きる。」という意味だそうである。英語で表現すると” finding odd moments in one’s busy life” となるようだが、忙しい時に趣味の時間を見つけるという意味では英語の方がしっくりする。

「大塚薬報」という大塚製薬の広報誌が、毎月、学長宛に届く。全ページカラーの高級誌で、「我 夢中人」という連載コーナーでは、全国各地の医師がどっぷりと浸かっている趣味の話が紹介されている。病院や自宅に自身の絵を飾るために美術館を作った医療法人の名誉院長、年に2回もリサイタルを開催するメゾソプラノの女医さん、津軽三味線にはまった精神科の医師、地域の医師会交響楽団を組織して指揮者として活躍する院長先生などなど、多士済々の医師たちが紹介されている。こういう記事を読まされると私自身もムズムズしてくるのです。

ご存じの方もいらっしゃると思うが、私自身は男声合唱を趣味として、熊本高校グリークラブのOB有志を母体とした男声合唱団 KGC を組織し、十年以上活動を続けてきた。ところがコロナ禍に見舞われ、国内のいくつかのアマチュア合唱団ではクラスターが発生するという事態もあり、集まって大声を発することは御法度となった。練習会場の確保もままならず、3月以降、現在まで休団状態で、再開の見通しも立っていない。

ムズムズ感が昂揚し、家内の誘いもあって、思い立ったのが7月から通い始めたウクレレ教室である。2週間に1回、8人ほどのグループでウクレレの先生からの指導を受けている。楽器演奏については全くの素人で、先生について楽器を習うのは、これが初めて。ウクレレの利点は、弦が4本でコードが簡単なこと、歌いながら弾き語りをすれば、あまり上手でなくても演奏が完成すること、入門用のウクレレは1万円程度で、途中で飽きても大きな出費にはならないこと、などであろうか。写真は9月末の屋外でのお見発表会。たった3ヶ月、わずか6回の練習での発表会は無謀であるが、人前で演奏することは大きな励みになる。しばらくは、飽きずに済みそうである。



9月末のウクレレ発表会。筆者は左から3人目。

10月・11月・12月の主な行事予定

10/30 (金)	医学検査学科 臨地実習認定式
11/7 (土)	学部リハ特別選抜（社会人）、助産別科推薦入試、大学院推薦選抜・社会人選抜（I期）入試
11/8 (日)	井芹川流域大清掃
11/17 (火)	認証評価実地調査（～11/18）
11/21 (土)	学部入試（学校推薦型選抜）[指定校]・[公募]
11/24 (火)	定期健診
11/25 (水)	インフルエンザワクチン接種
12/9 (水)	银杏学園理事会、賞与支給式（予定）
12/18 (金)	学校法人银杏学園忘年会（予定）
12/25 (金)	仕事納め

※12/28（月）は11/21推薦入試日分の振替休日です。12/29（火）～1/3（日）が年末年始休暇となります。

竹熊先生、第24回河津寅雄賞受賞決定！

この賞は、一般財団法人熊本県健康管理協会（理事長：小山和作氏）が地域医療、農村保健に大きな貢献を残された河津寅雄氏の貢献を讃えて設置された賞です。熊本県において地域保健活動、職域保健活動、保健福祉活動等とおして、熊本県民の健康水準に顕著な功労があった個人、団体を表彰するものです。

今回、地域包括連携医療教育研究センターの竹熊先生は、長年の熊本県における看護教育だけでなく地域でNPO「ホームホスピスわれもこう」の活動を展開し、地域住民に対する保健福祉の活動を行ってきたことの業績において受賞されました。

（文責：地域包括連携医療教育研究センター長 杉内博幸）



新レストラン棟オープニングセレモニー

9月28日（月）に新レストラン棟オープニングセレモニーとして、（株）戸田建設、（株）慶賓館（レストラン業者）、㈱ヤナギダ（ローソンのオーナー）、崎元理事長、竹屋学長および学友会副会長によるテープカットを行いました。セレモニーの中で、崎元理事長から事前に募集していたレストラン名の選考結果を発表していただきました。応募名称 232（応募者 159名）の中から1次選考で5つに絞り、最終選考で投票を行った結果、「レストラン ピリア」に決定しました。「ピリア」とは、本学の四綱領のうち「仁愛」に照応するギリシャ語で、学生たちが互いの友愛を深め、より有意義な学生生活を送ることができるようにとの願いが込められています。新型コロナウイルス感染対策の為、学生が新レストラン棟を使用できる時間は限られていますが、これから学生や教職員の憩いの場になって欲しいと思います。（文責：総務課）



令和2年度科学研究費採択

令和2年度の科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）に1件採択されました。おめでとうございます。（敬称略）

氏名	期間	研究課題名	交付予定額
伊吹 唯	R2-3	日本における移民の生活戦術と社会統合-同化論再検討	1,900,000 （直接経費）

9月度卒業式

9月18日(金)に学部卒業生2名の9月度卒業式を執り行い、竹屋学長より学位記が授与されました。今回は卒業生一人ずつに挨拶をいただき、とても心温まる式となりました。今後の活躍をお祈りいたします。(文責:総務課)



第2回FDセミナー「前期遠隔授業の振り返り」

9月14日(月)に教務委員会との共催で第2回FDセミナーを開催しました。新型コロナ禍での遠隔授業がどのように行われたか、また、学生・教職員のアンケート結果報告及び遠隔授業の課題などについて池田教授に報告・説明を頂きました。

新型コロナウイルス感染拡大により、本学も遠隔授業を実施することとなりました。遠隔による授業方法・授業支援の課題をクリアし、学生の通信環境調査、それに伴うファイルサイズなど、多くの問題点を解決し、すぐに遠隔授業を導入する方法として、既存のリソースであるAAAを基盤システムとしたオンデマンド型遠隔授業を実施することとなりました。

オンデマンド型遠隔授業評価については、「資料配布のみ」についての不満が32.5%、「音声・動画付き」が9.1%の学生が不満を示しています。因みに「同時双方向性の遠隔授業」では、17.2%が不満と回答しています。遠隔授業については、否定的意見が多いと予測していましたが、資料・教科書を丁寧に読む、必要な情報の収集・整理スキルなどでは評価が得られました。一方、コミュニケーションを含む学修スキル、学生同士で共に学ぶ経験ができないなど、マイナスの回答もみられました。

今後は、収束後の「ポストコロナ社会」を見据えて、対面授業と遠隔授業を組み合わせたハイブリッド型の授業形態も考えられます。従来の講義を録画して視聴できるようにオンデマンドで配信し、講義内容を踏まえた議論を対面、ライブで行うなど、効果的で質の高い授業にできる可能性もあり、遠隔・対面授業双方のメリットを最大限生かすことを考えていく必要があります。

(文責:FD委員長 檜原真二)

リハビリテーション学科合同就職説明会(Web形式)

リハビリテーション学科(1-4年)の学生を対象に合同就職説明会を開催いたしました。主たる目的は、施設情報を把握するとともに、自分の職業観を再確認し、進路決定の一助とするものです。今回は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、例年実施の対面形式ではなく、Web形式に変更して実施いたしました。具体的には学生専用の特別サイトを用意し、その中に参加施設のページを設けております。ページ内には各施設の業務内容や教育体制、採用情報などを掲載しており、学生が各自閲覧して情報を収集する流れとなっております。

期間中(9月15日から30日)は63施設(県内26、県外37)にご参加いただきました。

4年生はいよいよ就職活動が本格的に開始いたします。自分たちの納得のいく就職活動ができることを期待しています。

(文責:就職・実習支援課)



manaba 説明会

9月14日(月)、15日(火)に、後期セメスターから導入する授業支援システム「manaba」の説明会を開催しました。このコロナ禍の中、後期セメスターも教室の収容人員制限等があり、原則として対面授業は実習・演習・実技科目を中心とし、講義科目については多くのコマを遠隔授業で対応することとなりました。一方、FD委員会は前期遠隔授業の振り返りとして、「授業資料の工夫・学生へのフィードバック」「多様な授業コンテンツの提供を可能にする授業支援についての基盤システム整備」を課題としてあげています。今回、導入する「manaba」は、こうした遠隔授業の課題に応えるものとして、また、新型コロナウイルス感染収束後を見据え、多様な授業の支援(遠隔・対面授業を織り交ぜた授業計画、遠隔・対面を問わない教材の多様化など)に応えるものとして期待されています。よりよい授業支援システムとして運用されるよう教務委員会としてもバックアップしたいと考えております。

(文責:教務委員長 多久島寛孝)



私の秘話ヒストリー

今回は学生相談・修学サポートセンターの原口 奈美さんに投稿していただきました。

前職では、縁あって工学部建築学科材料研究室で長くお世話になりました。

初日の開口一番、「セメントとコンクリートの違いがわかるか」と聞かれ、「せめんととはやわらかい、こんくりーとはかたい」という小学生並みの回答に、先生からの返事は特になかったことが懐かしく思い出されます(間違っていないはず・・・)。

文学部出身の私にはまったく馴染みのない分野で、学生たちが型枠にセメントを流し込んだり、実験室の機械でコンクリートを破壊したりする様子はとても新鮮に感じられました。とりわけ、晴れた日にシャカシャカシャカと砂利を洗う音が聞こえてくると、今日も元気だな、とひそかに安堵したものです。

卒業生の多くは大手ゼネコン、中堅、地場の建築関係企業でがんばっています。おかげで、工事現場を見かけると、施工会社を確認するようになりました。

砂利乾燥機で作った焼き芋(なると金時)の味が恋しい今日この頃です。